

特集

総合型地域スポーツクラブと
コミュニティ

いつでも、どこでも、誰もが、日常の中で継続的にスポーツを行うことができる「総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）」。地域住民の運営によるスポーツを通じた多世代交流は、総合型クラブの最も大きな特徴の一つと言えます。

文部省（現：文部科学省）が1995年に総合型クラブの育成事業をスタートし、20年の歳月が流れました。近年では「財源確保」や「指導者確保」等、運営に課題を持つ総合型クラブが多い現状です。しかし、総合型クラブが地域に存在することにより、多くの人々がスポーツによるさまざまな恩恵を受けています。

今回は、地域社会論等を専門としている茨城大学の長谷川幸介先生より、さまざまな課題が挙げられている総合型クラブの“意義”や“可能性”を、現代社会の“地域コミュニティ”の実情と絡めて、お話いただきました。（以下はインタビューをまとめたものです）

長谷川 幸介（はせがわ・こうすけ）

茨城大学社会連携センター准教授、1950年生まれ、1975年茨城大学卒業。専門分野は教育法学、生涯学習論、地域社会論。「学校と地域の教育力」、「子どもの発達と地域の教育力」等をテーマに研究し、子どもたちの育成、地域づくり等について全国各地からの要請を受けて熱心に講演活動も行っている。また、「生涯学習とまちづくり」「今を生きる人間学」「教育法コンメンタール」など多くの著書がある。



▶▶▶▶「4つの縁（えにし）」が人をつなぐ

●みんなの幸せを育む「4つの縁」とは？

人は未熟な哺乳類として地球上に生まれました。だから、この未熟さを克服するために「幸せ装置＝社会」を作ることになりました。そして、この社会は人と人のつながりでできており、そのつながりを「縁（えにし）」と言います。「縁」は大きく分けて4つあります。

①「血縁」…家族のつながり

家族はお互いに支え合うという仕組みで作られた組織です。しかし、昔は3～4世代で家族を作っていた形が、この50～60年の間に核家族化が進み、その縁が徐々に弱くなってきています。

②「地縁」…地域の人たちとのつながり

薄れてきた「血縁」に代わる一つの「縁」として、地域の人たちとつながる「地縁」があります。ただし、これも大きな問題を抱えています。

今、地域には4種類の人があります。昔から住んでいる「土着の人」。ほかから移り住んで来た「定着の人」。社宅やアパートに住んでいていずれ町を出て行く「漂泊の人」。そして、海外から来た「異国の人」です。それぞれ違う価値観を持った人たちが一つになるのは大変な作業ですから、その時にルールが必要になってきます。そのルールを作るのに最適なのがスポーツで、「人をつなぎ」「違いを認め合っていく」作業に大変適しています。

③「友縁」…友達や同じ趣味・嗜好を持った人とのつながり

総合型クラブの人たちは、スポーツを通じてネットワークを作る、同じ趣味・嗜好を持った人たちです。一般的には同好会、サークルなどありますが、総合型クラブは同じ地域で生活する人たちが集まっています。つまり、「友縁」という同じスポーツをやっている仲間でありながら、また一方で地域と関わる人たちであり、一番重要な「縁」となります。



④「職縁」…仕事を通じたつながり

職場や仕事を通じてコミュニティを形成している人たちのつながりが「職縁」です。

一般的にサラリーマンはどんなに頑張って働いても65歳で定年です。会社に勤めている間は友達も多いですし、車の運転ができれば遠くの友達にも会いに行くことができます。しかし、高齢になり車の運転ができなくなると、近所の人との付き合いだけになってしまいます。また、遠方の友達との縁も切れてしまいがちです。

●無縁社会から脱却してみんなが支え合う支援社会へ

「4つの縁」がつながっていることでこれまで人間はいろいろな課題を克服し、幸せな社会生活を送ってきました。しかし、時代とともに核家族化が進み、家族、地域、会社などにおける人とのきずなが薄れ、孤立する人が増えている日本の現代社会のこうした一側面を「無縁社会」と呼びます。

ではどうしたらいいのか。お互いを支えあう「支援社会」を作っていく必要があります。そして、この「支援社会」を作っていくために、総合型クラブが一つの大きな役目を担う存在となります。

ただ普通にスポーツをやっている人たちと、総合型クラブでスポーツをやっている人たちは違います。単純にスポーツをやっている人たちは、地域社会に触れていない人たちが多く、好きな人たちだけで集まって自分たちの幸せだけを作っています。今後はこの人たちにも「つながり」を広げる必要があります、その人たちを巻き込んでいく要となるのが、総合型クラブになるのです。

どうか総合型クラブを運営されている皆さんは、「自分たちはスポーツを通じて地域の人たちと協力して地域作りをしているのだ」と誇りを持ってください。

その誇りを胸に活動が続けることで社会的評価が高まり、より多くの地域住民をはじめ、多くの方々に「総合型クラブの活動は重要だ」と気づいてもらえるはずです。財政的に厳しいからといって、活動をやめてしまうには惜しい組織だと思います。

▶▶▶▶ 総合型クラブの“意義・可能性”とは？

●「健康は3つに分類できる」

私はスポーツと密接な関係にある健康を、「肉体の健康」、「精神の健康」、「縁の健康」と3つに分類しています。このうち、「縁の健康」について、お話ししましょう。

「縁(えにし)の健康」。これは、人と人がつながる健康のことを言います。

例えば、腕立て伏せが50回できる70代の男性がいるとします。その人が、離れ小島で「今日は腕立て伏せ、51回まで挑戦するぞ」と頑張ったとしても、誰もいない所では褒めてくれる人はいません。そんな人生は健康(幸せ)でしょうか？ 地域でみんなが集まってラジオ体操をやる時、「〇〇さん、元気？」と声を掛け合う仲間がいるから、幸せを感じられるのです。人と人のつながりの中で健康は生かされるということです。

●多くの地域住民と“つながろう”！

前述した「3つの健康」のすべてに応えられるのが総合型クラブです。特に「縁の健康」は一般のスポーツクラブにはない要素と言えます。今、総合型クラブは財政面等で逆境にあるかもしれません。しかし、逆に言えば、お金に縛られているクラブ運営をもう一回変えていくチャンスではないのでしょうか。

そこで、総合型クラブの皆さんにお聞きしたいと思います。本当に地域の人たちと関わっていますか？ 例えば茨城県で言うと、県民300万人のうち、約80万人が高齢者になっています。そういう高齢者(老人クラブなど)に声を掛けたことがあるのでしょうか？ 子育て真っ最中のお母さんとのつながりはどうですか？ 子育てはストレスを背負います。そんなお母さんと子どもが簡単にできる軽スポーツを提示したことがありますか？

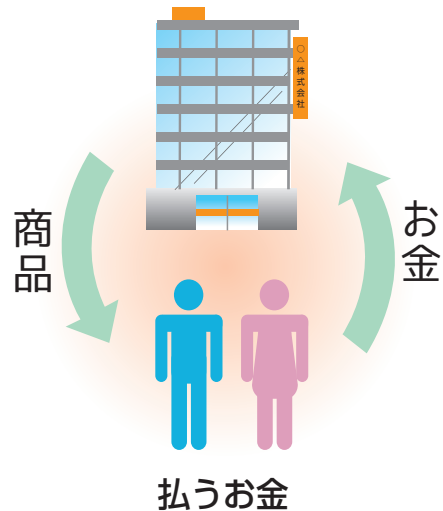
総合型クラブは健康で幸せな生活を送るために運営しているのですから、従来のスポーツの枠を超えて地域とつながる新しいスポーツの在り方を考えてほしいのです。総合型クラブの目の前には可能性がたくさん広がっています。それを見つけられるかどうかは、これからの皆さんの活動にかかっていると言っているでしょう。

●お金には換算できない意義のある活動

総合型クラブが集めたお金はただのお金ではありません。例えば、300万円の会費、もしくは助成金が入ったとします。総合型クラブにとっては、この300万円は人と人がつながった実績になるのだと思ってください。民間企業のように金額で捉えるのではなく、人と人のつながりの実績を数字で表しているだけです。お金と見ると気が乗らなくても、人間同士の縁が作ったものだと思えば、自分たちがやっていることにすごく誇りが持てるはずです。もしお金に困っているなら、つながりを作ろうという思いで事業を考えればいいし、財政が厳しくなった時につながりの大切さが初めて見えると思います。だからチャンスなのです。総合型クラブには民間スポーツクラブにはない、地域住民が集まるメリットがあります。それを事業化するというのはただのお金ではなく、人と人のつながりの実績だということを理解する必要があります。

また、文化人類学では「払うお金」と「包むお金」という2つの言葉があります。「払うお金」とは、物が右から左へ流れ、お金が左から右へ流れます。つまり売買です。一方、「包むお金」は友達同士、親戚、知り合いなどの間で動くお金です。例えば、結婚式のご祝儀がまさにそれで、お祝い金を払うとは言いません。「ご祝儀を包む」と言います。

それと同様に、総合型クラブの売り上げ（会費や助成金など）も「包むお金」です。そこをきちんと理解せずに、お金というと全部一緒に考えてしまいましたが、私たちが思想とする総合型クラブが事業で得るお金は「包むお金」であり、人間同士のつながりを作っていくお金だと理解して戦略を作ることが大切です。



●幸せ作りのために総合型クラブがある

今回、私が一番言いたかったのは、「総合型クラブは何のためにやっているのか」ということです。お金がないから不幸（無理）だと思わず、「幸せ作りのために総合型クラブを運営しているのだ」ということを心に留めていただければと思います。